

日本福祉大学社会福祉学部・日本福祉大学福祉社会開発研究所  
『日本福祉大学社会福祉論集』第112号 2005年2月

## 浦辺 史とその教員時代

ペスタロッツィへの傾倒から「教育労働者」へ

柿 沼 肇

### はじめに

生前の浦辺 史先生（1905. 6. 21. 2002. 8. 7.）は、児童問題、保育問題（さらに広くいえば社会福祉）の研究者として、あるいは実践・運動の指導者として、極めて著名であった。また、長い間日本福祉大学の学監や学部長などの重責を担い、民主的な大学の創造のために奔走されたことを知る人も少なくない。さらにまた、日本の平和と対米従属からの自立を目指し、民主主義の擁護・発展と国民生活の向上を企図した社会的諸活動に積極的に参加し、その先頭に立って奮闘してきた一人としてもよく知られている。1972年には東京の多摩ニュータウンに社会福祉法人多摩福祉会を設立し、「こぐま保育園」を開設して、それまでの40年以上にわたる保育実践と保育研究の成果に基づく経営を開始した。それは、地域住民の大きな期待とともに、民主的な「保育所づくり」の実践として全国的な注目を集め、今日に至っている。

それとは反対に、氏の「社会人」としての本格的な出発が小学校の教員であったこと、しかもまれに見るすぐれた実践家であり、困難な時代の教育運動の中心的な担い手の一人であったことを知る人はまだまだ少ない。しかし実は氏のその後の生き方を基本的に方向づけたのは、この時期の教育実践、教育運動の経験であったのである。したがって、70年近い氏の民主主義実現のためのさまざまな努力の中から後に続く私たちが何物かを学び取り、現在の仕事と生活の中でそれを生かすことを望むなら、どうしてもこの時期の氏の「体験」をもう一度しっかりつかみ直しておくことが必要となる。

と同時に、氏の教員、教育運動家としての活動の中身を整理し、再確認しておくことは、私たちが長年にわたって、とりわけ教育運動史研究会に依拠して続けてきた「近代日本の人民の教育要求の実現課程を『未発』のものも含めて歴史的総体的に明らかにする」という課題（それを総括的に教育運動史研究と呼んできた）に対しても一定の寄与を為し得るものと思われる。何故なら、氏がその当初から参画した教育運動こそ1930年代に天皇制絶対主義教学体制の下で言葉に尽くせないほどの苛酷な弾圧に抗して展開された「新興教育運動」と称されるものであって、「戦後」の教育運動史研究においてその全面的な解明が要請されている運動であるからである。

新興教育運動の研究は、主として1960年以後に急速に発展し、「権力とその教育の本質に対する科学的、階級的な批判を非妥協的におし進めた運動、教育をその社会の経済的・客観的基礎と政治的・文化的な支配の機構との関連の中で科学的にとらえ、その関連の中でまさに総合的に教育闘争を組織し展開した運動」<sup>(1)</sup>（岡本洋三）であることが明らかになってきているが、まだまだ豊かに包蔵されている遺産を十分に究明したとはいえない難い状況である。運動を全体として把握することを常に念頭におきながらも、さまざまな視角（個別の問題関心）による検討が依然として必要であり、総体としての研究の水準が深められることが求められているといわなければならない。

この小論では、以上のような問題意識に立って新興教育運動とその前史の中で果たした氏の役割・業績といったものを明らかにすることに力を注ぐことにする。ただし時期的には氏の教員時代までとし、弾圧による検挙・退職後について新興教育運動の専従的活動以後については近い内に別稿を準備することにしたい。

なお氏には「戦前」の実践や運動あるいはその生きざまなどについてご自身で執筆したり話したりした論稿がかなりたくさんある。その内教員としての実践や教育運動に関する代表的なものとしては、次のようなものをあげることができる。

川田由太郎署名「社会的目覚め即失業」、国文一太郎編『石をもて追われるごとく 受難教師の手記』英宝社、1956年11月

浦辺 史『日本保育運動小史』風媒社、1969年5月

対談「無産保育運動 幼い子どもたちのしあわせを求めて」、海老原治善編『昭和教育史への証言』三省堂、1971年11月

浦辺 史「川田由太郎と新興教育運動」、井野川潔・森谷清・柿沼肇編『嵐のなかの教育 1930年代の教育運動』新日本出版社、1971年12月

座談会「子どものいのちと発達をまもる保育運動 浦辺さんを囲んで治安維持法下の活動をきく」、『季刊 教育運動研究』1976年7月創刊号、あゆみ出版

浦辺 史・竹代『道づれ 新しい保育を求めて』草土文化、1982年5月

浦辺 史・竹代『福祉の昭和史を生きて』草土文化、1994年6月

また、この小論で扱う潤徳小学校と児童の同盟休校事件については、同僚であった増淵 穰氏の執筆した「潤徳小の二つの教室」が雑誌『教育』の1965年9月号に掲載されている。これらの諸文献を活用させて頂きながら、私なりの角度で表題のテーマに取り組んでみたいと思う。

ところで、私が「浦辺 史」という名前と最初に出会ったのは、今から40年も前のことである。1964年4月駒場から本郷の教育学部に進学して、そこで大田堯先生とそのゼミ生・大学院生が中心となって組織していた民間教育史料研究会の活動に参加するようになったのがそもそものはじまり、ということになる。その頃「民間研」は、1930年代の雑誌『生活学校』や『新興教育』の輪読を進める一方、戸塚 廉氏や井野川潔氏らが推し進めていたそれらの復刻刊行事業に協力

して、できたばかりの書籍を荷造りして全国の講読者に発送するという作業を受け持っていた。そういった活動の中で、「浦辺 史」という文字を目にし、耳にするようになったのであった。程無く私は「新教懇話会」（後の教育運動史研究会）の事務局（責任者井野川氏）の仕事にも精を出すようになり、そこで接する「当事者」（「戦前」の民主的な教育運動に直接・間接に参加した経験を持つ方々のこと）から数多くのことを学んでいくうちに、卒業論文では「新興教育運動」に取り組みようと決意するようになった。そしてその学習の過程で、今度は「川田由太郎」という名前に出会うことになる。元教師であった彼は、山下徳治、浅野研真、池田種生などといった人々と並んで新興教育運動の中でとても重要な役割を果たしていた。その「川田」こそ、ほかならぬ若き日の浦辺先生であることを教えてもらったのも、ちょうどその頃のことであった。

1971年4月、5年間の大学院生活を終えて全く思いもかけず日本福祉大学に就職することになった。その少し前、選考委員との面談のために大学に行くと「これから学監に会わせる」とのこと。学監とは福祉大では学長代行とでもいってよいような役職で、学長業務を事実上切り盛りしていた。緊張して学長室にうかがうとなんとそこにいたのは浦辺先生ではないか。これには大変びっくりした。以後、先生が定年で福祉大を退職（1976年3月）されるまでの間、一緒の大学で仕事をさせて頂くことになった。また、その後も含めてのことであるが、いろいろな場で研究上の励ましやご指導を頂くことができたのであった。

そんな関係であるので本来なら私は先生を何時でも敬称をつけてお呼びしなければならないのであるが、実をいうとそういう風にお呼びした記憶がほとんどない。先生の権威ぶらないことをいいことに、何時も「浦辺さん」「浦辺さん」というように言い習わしてきた。そこで本稿でも「浦辺さん」と記すことが一番ふさわしいという思いがするのだけれど、先生自身が既に物故され（2002年8月7日）、書き記す内容も「歴史」的なことであるので、以下の記述では浦辺 史 ないし単に浦辺というように記すことでお許し願いたいと思う。

## 1. 郡部の小学校で 農村の子どもたちのために全力を

浦辺 史は、1923（大正12）年3月東京府立織染工業学校を卒業して、1年間の税務署勤務の後、24年4月教員養成を目的としていた東京府立豊島師範学校（東京学芸大学の前身）第二部に入学する。しかしそれは、教員という仕事に憧れや理想を描いていたからではなかった。後年の浦辺からは想像しにくいが、吃音のため人間相手の職業に就くのはいやだ、というのが当時の浦辺の率直な気持ちであった。化学の研究者になることが彼の目指すところで、それで最初は東京高等師範学校（東京教育大学の前身）理科を受験したのである。しかしそれに失敗。家庭の事情に迫られ手っ取り早く収入の得られる方法として、「師範」の「二部」に行って教員になるという道を選んだのであった。そのころの師範学校は中等学校を卒業した者に対し1年間の就学で教員の資格を出す「二部」という制度があって、浦辺はそこに目をつけたわけである。1年後の25年3月に卒業し、高尾山の麓、東京府南多摩郡浅川村浅川小学校に赴任することが決まった。翌

4月から8月まで、当時の師範卒教員に義務づけられていた短期現役兵として東京の歩兵第一連隊に入隊し、「国民軍仕官適任証書」を得て、9月からいよいよ同校の訓導として教壇に立つことになった。今から80年ほど前のことである。

後々から考えてみると、浦辺にとってこの不便な郡部の小学校に配属されたということはかなり重要な意味を持っていた、といわなければならない。当時、東京の教員は、できるだけ旧市内に就職し、私大の夜学などに通って中等教員の資格をとり、教頭や中学校教員になることを夢みる者が多かった。そしてそれにはそれなりの理由があった。一般的にいって教員養成を目的とする師範学校には、長男でないため家督を継げなかったり、経済力が十分でないために、学力はありながら中学校（やがて高等学校や大学へ）へ行けない者たちが数多く集まっていた。学費が免除されていたこと、しかも一定の生活費（浦辺の時代には一日45銭）さえ給与されること、つまりお金をかけることなしに勉強ができるということがその最大の理由であった。自己の能力に対する信頼が強いだけに、現状に対する不満と同時に「立身出世」意識（その「出世」の範囲がたとえどれほどささやかなものであり、限られたものであったとしても）が根強く支配する。浦辺とてこの例外ではなかった。辺鄙な郡部への配属は、この「立身出世」の夢に決別を迫られることでもあったのである。しかも浦辺は、この配属に異を唱えるだけの余裕を持ち合わせていなかった。

浦辺は、1905（明治38）年6月25日、東京府南多摩郡由井村（現在八王子市）に生まれた。農家の三男（9人兄弟の上から4番目）で、そのころは村の中でも比較的裕福な方であった。1912年4月に由井村第二由井尋常小学校入学、成績優秀で全学年を「優等」で通した。18年3月に卒業した後、4月に、苦勞して教員になっていた兄夫婦の経済的援助で、織染工業学校の織物科に入学。この学校は、八王子にあって自宅から通学可能な唯一の学校で、23年3月卒業した。ここでも成績は優秀で常に3番から8番の間にあったという。しかしながら吃音であったために心ない友人や教師から侮辱されることも多く、青少年時代には親しい友人を持つことができなかった。兄が時折送ってくれた修養書などを読んで歴史上の偉人にあこがれ、教師のいうがままに生真面目に勉強するという生活を送っていた。他方、家業は次第に没落し、織染学校在学中の20年暮れには八王子市に転居、賃機織業を営むが2年足らずで倒産、父親は失踪、一家四散の羽目に陥った。父と長兄の不仲ということもあり、家族の生計を支え生活を立て直す責任が浦辺の双肩に重くのしかかかってきた。一刻も早く職につき収入の道を切り開くことがどうしても必要であった。豊島師範で学び、小学校へ就職する時点での浦辺の身辺はこのように深刻な状況であったのである。自己の願いとどんなに異なっていたとしてもそれを拒否できるような状態ではない。一も二もなく浅川小学校へ赴任せざるを得なかったのである。こうして浦辺の青年教師としての歩みが始まる。この時年齢は20歳であった。

浅川小学校に赴任した浦辺は、無我夢中になって子どもたちの教育にあたる一方、だんだんとスイスの偉大な教育者ペスタロッチ（J. H. Pestalozzi 1746. 1. 1827. 2.）の著作に親しむようになる。そしてその読書を通じて、次第に若き日のペスタロッチに傾倒していく。産業革命が始

まる前夜の時期、貧児学校（貧児教育院）を作って彼らのために献身し、教育によって人間を変え、それを通して悪しき社会を変革する、というペスタロッツの思想と実践に深く感動し、そこに教師のあるべき姿を見てとったのである<sup>(2)</sup>。

浦辺は「戦後」の著作の中でその頃のことを次のように記している。当時執筆したものではないので幾分注意が必要だが、浦辺がペスタロッツのどこに共鳴していたのかを知る上で役に立つので、少々長いが引用しておきたい。

「子供を教育することによって、よりよい社会をつくるという若き日のペスタロッツィがその頃の私の理想の師であった」（川田由太郎「社会的目ざめ即失業」）。

「産業革命の前夜に生きたペスタロッツィは、貧児が自らの労働で暮らせるように彼らを助けようと心をもやした。職業にあつてつねに他人に関心をよせた。とりわけ周囲の貧農や貧児に目を向けた。貧しい子どもは喜捨をうけることではなく、働くことを学ばねばならないといて、貧児学校を作つて労働と教育の結合を実践した。工場でもなく学校でもなく、仕事場と教室のある大きな家庭が貧児学校であり、ペスタロッツィはその父であった。子どもに対する無私の献身に教師の心をみて、私ははげしい感動をおぼえたものである。ペスタロッツィは教育によって、まず人間を変えることで悪い社会を変えようと真剣に考えていたのであった」（浦辺 史・竹代『道づれ 新しい保育を求めて』49～50ページ）。

校内では四人の若手教員で集団をつくり研究会活動を行ったり、ペスタロッツィ生誕百年祭記念の研究集会を開催したりした。その集まりは余り目標のはっきりしたものではなかったが、時には校長に対する批判などがなされたりもした。他方、赴任してしばらくの後失踪中の父が見つかり、父母と妹とが東京・中野で暮らすようになる。浦辺は57円の給料の内30円ないし35円を送金し家計を補助した。そのためもあって生活は決して楽ではなかったが、しかし新しい希望も生まれてきた。父母の下から学校に通うという理由で、旧市内に近い中野の小学校への転任の道が開けてきたからである。しかもその願いは、知人の手助けによって「内定」というところまでたどりついた。一度失いかけた「立身出世」の夢が再びもたげてくる。しかしながら事態はそれとは全く反対の方向へ進むことになってしまった。5・6年と担当した子どもたちを卒業させると、わずか2年余にして、一層山間の七生村（現日野市）潤徳尋常高等小学校へ不意転勤させられたからである。こうして「立身出世」の夢は完全にうちへしがれてしまったのであった。そして同時に、この時から教育者としての浦辺の真の歩みが始まるのである。浦辺は後に当時のことを回顧して次のようにいっている。「この不意転勤は私の教員生活に決定的な転換を与えたのであった。私は市内にでて出世のために向学することを全く放棄して、全生活を農村教育に捧げることに心をうちすえた」<sup>(3)</sup>。

1927（昭和2）年4月から潤徳小学校での新しい教員生活が始まった。相変わらず父母と妹たちの生計費の負担に耐えねばならなかったが、またそれ故にたばこや酒も飲まず、スポーツや賭け事にも目を向けずに、一途に子どもの教育に生きがいを見つけ出そうとした。子どもの教育を通して社会の改革を目指した若きペスタロッツィが、理想の師として彼の心をますますとらえてい



く、そのようなところへ豊島師範の1年後輩にあたる増淵 穰が、5ヵ月間の短期現役兵の生活を終えて赴任してくる。もともと増淵は教員になる気などなく、栃木県の真岡中学校を卒業して美術学校への進学を希望したが両親などに反対され、絵の勉強を続けるため仕方なく教員になったのであった。しかしながら、浦辺と共同の自炊生活を行い、またその熱心な教育活動をまのあたりに見て、次第に教職を見直すようになる。こうして若い二人の教師は意気投合しながら教育活動を展開するようになっていく。

彼らの教育実践は、総じていえば児童の個性尊重を唱えた「大正新教育」「大正自由主義教育」の延長線上にあったといい得よう。「新教育」の一中心校であった私立成城小学校の教育問題研究会機関誌『教育問題研究』（編集者鯉坂国芳、後小原と改姓）などが、彼らの教育方法上の有力な拠りどころであった。綴方を書かせ学級文集を作成する、教室ノートや学級文庫を設置する、基礎学力テストに基づく分団学習（読み方、算術の学力別グループ学習）を行う、オルガン・謄写版などを生徒へ開放する、級長を選挙制にする、などとともに、学級自治会活動が重視された。その活動は発展し、やがて浦辺、増淵両学級を中心に学校自治会の組織化にまで進んでいった。それは、3年生以上の各学級自治会からそれぞれ4名の代表（自治委員）を選出し、校長はじめ全教員の出席を求めて、土曜日ごとに開催された。そこでは、生徒同士、学級間のもめごとなどの解決がはかられたが、一番大きな問題になったのは教師に対する不満、批判であった。教師の「えこひいき」が鋭く批難され、「朝礼の時、上ばきで運動場へ下りる先生があるが、廊下や教室が汚れるからやめてもらいた」とか、「みだりに子どもを自分用に使わないで下さい」、「宿題をやってこなかった生徒を、理由もきかないでたたせるのはよして下さい」などの要求が強く出られるのであった<sup>(4)</sup>。その中身は、依然として「自由主義教育」的なものであるが、しかし当時の公立小学校ではほとんど学校自治会活動が行われ得ず、またわずかにやられているところではむしろ子どもの自主性を逆用して教師の意思を押し付けるようなものが支配的であった中では、やはり特別な意義を持つものであった。そして何よりも、子どもの上に絶対的に君臨することを当然とされていた教師に対して、生徒が批判し要求を提出することを認めたこと、またそれを制度的に保障し、その制度の担い手にふさわしく子どもを教育したことなどは、公立小学校の歴史において画期的なことであったといってよい。この時の経験は、後に新興教育運動の中で提起される学校自治会活動の組織化方針<sup>(5)</sup>の折に生きてくる。

若き日のペスタロッ치를信奉しつつこのような教育実践が深まり発展する一方、浦辺の精神形成はあたらしい方向に向かっていく。それは社会科学（マルクス＝レーニン主義、現在では科学的社会主義といわれる）との接触を通してであった。

もともと浦辺は進歩的な思想の持主ではなく、むしろ皇室中心主義的な意識を持っていた。教師になってもはじめの内は、国史の授業で児童に「尊王」を鼓吹したし、皇族方の御陵参拝の奉迎等の折には限りない感激に打たれた、というほどであった。しかし農村の子どもとの苦闘は、このことに大きな疑問を抱かせ、拡大させてきていた。そのような状態の浦辺に、直接社会科学への接近の道を開いたのは同僚増淵 穰であった。増淵は、教育活動においては浦辺にまだまだ

及ばなかったが、既に中学生時代に軍国主義的校長の排斥ストの責任を問われて一ヵ月の停学処分を受けるという経験を持ち、また高校に進学していた友人や、栃木で教員をしてマルクス主義のグループに参加していた姉（増淵仁保）から、影響を受けていた。潤徳小で浦辺に出会い、教師として「開眼」した彼は、もっぱらマルクス主義の文献学習に励んでいた。そして両者はお互いに刺戟し合いながら成長していく。浦辺の読書は、ペスタロッチや石川啄木、島崎藤村などからクロボトキン『青年に訴ふ』をはじめ山川 均、河上 肇などの社会科学書へと広がっていった。しかも増淵は、八王子を中心に青山師範卒の野津一郎や豊島師範卒の町田知雄、山口近治、新井信夫ら若手教師がつくっていた謄写版同人雑誌『分教場』（1928年結成）グループに加わっていた。彼のさそいで、浦辺もこの同人組織に参加するようになる。その組織は、基本的には文芸集団であったが、会合の席では何時でも職場（学校）でのさまざまな不平不満がぶちまけられたりした。また時には社会主義的文献の購読研究も行われ、「アナ・ボル」<sup>(6)</sup> 未分化な状態での議論、学習ではあったけれど、浦辺にとっては一定の意味を持つものであった。

このような形で浦辺の社会科学への接近の端緒が開かれたのであるが、その系統的組織的な学習が自覚的に遂行されるようになるのはもうしばらく後のことである。基本的には、相変わらず教育熱心なペスタロッチアンであったのである。したがって、教師が労働者であることの認識も、教員組合結成の必要性についても、この段階ではほとんど無自覚であった。その点からすれば、浦辺の認識は、当時の先進的な教師に比べて、かなり立ち遅れていたといわなければならない。しかしながら、「立身出世」意識を克服した真摯な教育活動こそ、やがて本格的なマルクス主義の学習と結びついて、浦辺をして強靱な「教育労働者」へと自己確立を行わせるようになる主要な要因であったことは、この際十分に確認されておいてよい事柄である。

なお、この時代の浦辺の教育活動を知るうえで大きな手がかりとなる文章があるので、少々長いですがそれをここに書き止めておきたい。それは和光大学の学生（早川 保）が卒業論文で「潤徳小学校盟休事件」に取り組み、1974年の秋、当時の教え子（守谷ハル）から聞き取りを行ったその時の記録である。浦辺の前記著書『道づれ』の中にも引用（54～55ページ）されているので、そこから再引する。

「先生とは、ほんとうに心から接していた。丘の上の別荘（当時浦辺と増淵が共同して住んでいた隠居所をしゃれてこう呼んでいた——柿沼註）には、ほとんどの子が遊びにいき、そこで本を読んだり、歌をうたったりしてたのしんだ。地域の人たちにも親しく、たとえば農家の人たちが田植をしていると、さっとズボンをまくって田植を手伝うほどだった。先生はみんなのあこがれの人で、二級上の姉からもうらやましがられた。家庭訪問もよくやってくれた。先生は石川啄木、吉田弦二郎、島崎藤村などの本を貸してくれたり、ペスタロッチの本を朗読するのがおはこでした。私の読書好きは先生の影響です。綴方は批評してもらうのが好きでたのしみであった。詩を書くとうたえるようにしてくれた。私が書いた『ありさん』を今でも覚えている。あまり先生らしくない先生だった。だれでも平等にあつかってくれ、とてもやさしい、何でも気軽に話せる兄貴が友達のようなだった。それに生活の苦しい子

や成績の悪い子はとくによくめんどうみてくれた」。

ここには潤徳小時代の浦辺の人柄と教師としての姿勢がよく描かれている。教科書以外には本を手にとることさえ少なかった貧しい農村の子どもたちが、浦辺の指導で「読書好き」になり、文を書くことに喜びや張り合いを見出すことができるようになっている。とりわけ「生活の苦しい子や成績の悪い子はとくによくめんどうみてくれた」というところなどは教師としての浦辺の原点といってよく、また、それから後の生涯にずっと貫き通される生き方の原則ともなっている。

## 2. 教員組合結成への動きと順徳小児童盟休事件

浦辺 史が教育に情熱を燃やししながら、社会科学の学習を始めたころ、『分教場』グループの中心的なメンバー（野津一郎、町田知雄、山口近治、新井信夫、増淵 譲ら）は教育文芸化協会に加盟していた。この「協会」は、上田庄三郎とともに『教育新潮』（日本教育学会という出版社から出されていた教育評論誌）の編集に携わっていた上田唯郎の仲介で、東京の文芸同人誌『義足』 青年教育家連盟のグループ（野津、本庄陸男、佐野五郎ら青山師範卒）および『分教場』グループ、神奈川の望洋会グループ（黒瀧雷助、増田貫一、小出敬治ら鎌倉師範卒）、それに山梨などの青年教師たちによって1928（昭和3）年10月結成されたものである。

その目的とするところは、「人間を圧搾している教育組織と、そこに生えたカビと雑草と、それらの中で我らはゆたかな人間性を渴望する。我ら教育者の手に托された児童は日々、その純真さを殺され、我ら教育者はその発ラツさをうばいとられつつある」、「我らはそれらの教育の反動化、機械化に抗するに我らの文芸を以ってする」（『教育文芸家協会宣言』）というところにあった。会員は創立当時21人、半年後に40名余りに増加している。しかしこの文芸愛好教師の集りも、金融恐慌以来の日本経済の破綻や、三・一五事件、四・一六事件、山東出兵など内外にわたる諸暴圧と、全国化した教員生活の不安（不意転、<sup>かくしゅ</sup>餓首、俸給不払い、遅配など）の中で、不意転反対闘争や不払い反対運動を組みながら、次第に教員組合結成の必要性を自覚し、その方向へと活動を転換する。そして、そのために29年5月、組織名称を変更し、教文協会と改称したのである。教文協会の方針は、「教文協会テーゼ」によって見る限りにおいても、教育文芸家協会の時に比べて大きな変化が認められる。その一つは、マルクス主義の立場に立脚することの必要性と必然性が自覚されていること。第二に、階級闘争全体の中での位置づけを行って「全国的闘争に於ける教育戦線の一翼を分担するもの」と自己限定し、そのうえで「教員大衆の意識的戦闘的組織の拡充と拡大及び強固なる団結」こそがその目標とされていること。第三に、「自然発生的な不満反抗をのみ形成する事に我々の努力を止め」ておくのではなしに、「正確に大衆を意識化し組織化せねばならない」として、教員に対する積極的な働きかけの重要性が確認されていること、などである。そしてこの基本線に沿って各地に支部を作り、その発展を基盤に下からの盛り上がりによって教員組合の結成を目指したのであった。教文協会の時代にはまだ教員組合の結成という課題は実現されないが、現在発掘されている「教文協会ニュース」にとりあげられてい



るだけでも東京の八王子、北多摩、荏原と大阪の四地域に支部が組織され、川崎、山梨、大分で支部確立の準備活動がなされている。

このように教師の自覚が次第に高まっていく状況があつて、しかも身近にいた『分教場』グループの多くが教文協会の八王子支部を結成して活動を行っているのに、浦辺はそれらの組織に正式な会員としては参加していない。教育活動に全力を投入していたことが、『分教場』以外の教員の活動に主体的にかかわらなかった主な要因であつたが、同時に、世相を反映して安易に大言壮語するような「マルクスボーイ」やデカダンな生活ぶりに対する反発があつたということも事実であつた。さらに社会科学の学習がまだまだ十分とはいえず、教育の本質的な矛盾の発見とその克服の方向を見定めることができずにいたということも、その一つの要因であつた。

このような浦辺にとって 1929 (昭和 4) 年 9 月の不意転反対の闘い、いわゆる潤徳小学校児童同盟休校事件は人生における第二の転機ともいふべき重大な経験となった。後年浦辺はそのことを次のように語っている。「もし、あのとき私がたたかっていなかったならば肌で権力の力、教育の持つ重要さを学ぶことができず、ただ一人の“まじめ”な教師で終っていたでしょう。いずれにしろ潤徳小学校でたたかった経験は、それからの私の進むべき方向に大きな影響を与えました」。

この「事件」は学級自治会、学校自治会活動などを通じて生徒の自発学習、自主活動を熱心に指導し、父母からの信頼も得るようになったすぐれた教育実践を続けていた浦辺、増淵両訓導に対して、小泉栄一校長に代わって赴任した廣井 博校長が夏休み明けの直前 8 月 30 日に、理由も示さずに学年途中での転任命令をいいわたしたことに始まる。二人はこの辞令を拒否し、新学期早々、子どもたちに真相を伝え、校長に抗議した。そして二人を支持した受持ち児童（高等科 1、2 年生）と 6 年生の子どもたちが、学校裏の山中に立てこもり、登校を拒否するという事態に発展したのであつた。このストライキは、教文協会八王子支部の応援もあつて 5 日間続けられ当局は窮地に追い込まれるが、やがて親の一部に動揺が生まれ、また教師の説得や青年団幹部の執拗な切り崩しにあつて、要求を実現できずに終息する。1 週間後、浦辺は西多摩郡五日市小学校へ、増淵は南多摩郡恩方第一小学校へ赴任することになった。

要求実現はできなかったが、この闘いを通じて浦辺の意識は大きく発展する。教員組織（教員組合）の必要性を自覚し、教文協会の活動に接近する。また本格的な社会科学の学習を自覚的系統的に実行するようになる。翌 10 月、教文協会が発展し、小学校教員連盟が組織された時、浦辺は増淵と共に連盟の創立に参加したのであつた。以後、全日本教員準備会から日本教育労働者組合、新興教育研究所の運動の中で一貫して教育労働者の誠実な一員として活動を展開するのである。

この児童ストライキは、浦辺や増淵個人にとって重大な意味を持っていただけでなく、当時の教育界に相当大きな衝撃を与えた。新聞、雑誌、ラジオがセンセーショナルにこの問題を取りあげた。例えば『東京日日新聞』は、府下版で「訓導の転任から突如 学童の盟休おこる 七生村潤徳小学校空前の紛擾 学務委員会緊急協議」（9 月 7 日）、「府下初の学童盟休 男女生六十余

名「不動尊に山籠り」(9月8日)など5回にわたってかなり詳細な記事を掲載し、全国版では「視学の訓戒を聞かず 潤徳小学生盟休を続く」(9月8日)、「先生の転任を嘆き 小学生同盟休校……『先生を返せ』と校長に迫り」(9月8日夕刊)と報道した。当事者の一員である小島府視学は「教育界の不祥事」と談じ、「校内不統制」(八王子第三校長)や「背後に力か」(第二商業校教員)、「統制と訓練 戒心すべき教育」(第四高女教員)、「新旧二つの流れ」(八王子市視学)といった論評が教育関係者によって行われたのであった。また雑誌『教育時論』は、「児童の盟休は、社会問題の上からも、又教育問題上から観ても重大な事件である」として9月15日号で「小学児童の盟休事件に就ての感想並に批判(八王子市外潤徳小学校問題)」を特集し、「東日」の記事とともに10名余の「諸家の感想並に批判」を掲載した。さらに10月5日号では、校長廣井 博に「潤徳校事件の弁」を執筆させ、弁明の機会を与えたのであった。それらの中でとりわけ注目されるのは、廣井がこの文章の中であげている二教師の「転任の理由」である。それは二つあり、一つは「教育上の主義方針につき学校長の意見を尊重せざること」、他の一つは「両名の訓育方針は人格を認める上、自由を与える上、児童の自治会、児童の権利主張の上、個性尊重の上等に誤りが多い」というものであった。ここからも分かることは、マスコミの多くが報じたように単に仲が悪かったとか感情の行き違いなどといったものでは決してなく、実は子どもの把握の仕方や教育実践の中身こそが問題とされたのである。この点は、前記小島視学の談話によっても裏付けられる。「この転任についての私的感情云々は認めない。問題の両訓導の教育方針も普通とは違って生徒の自我尊重において居た事も旁々原因の一つである」と明言しているのである。問題の本質はまさにこの点にあった。だからこそ、マスコミの支配的な論調が「児童盟休」という抗議の形態だけに着目し小学生のストライキの是非論に多くを費やして全体として批判的であったのとは反対に、進歩的な教師や知識人の共感をよぶところとなったのである。宇野東吉(筆名か?)は前記『教育時論』の特集号で「盟休は何を教へるか」という一文を執筆し、「その直接の原因は、決して校長対児童のみにあるのではなく、学校対児童にあるのでもない。実にそれは視学与校長の平教員に対する官僚主義的重圧にあるのだ。この官僚主義に対する児童の集団的憤激こそ、今回の盟休事件である」と分析し、「一人の裏切りも、敗北者もなく、よく最後まで団結し得たと云う事は、両訓導の教育が如何に児童の心意に密接に食ひ込んでゐたかと云ふ事を物語るものである。教育は人格の接触結合であり、教育は団結向上である」と指摘した。また江頭順二(本庄陸男)も、「新しい『師弟関係』の表現」としてこの問題を把握し、「新教育の新時代性に於て、充分の好意を示すものは、若い教育者だ。新しき民衆に這入って行く教育だ」と主張したのである。

ところで、当時の日本の教育や教育運動の中でこの事件の持った意義を改めて整理してみると、少なくとも次のようなことを指摘できるのではないと思われる。

第一は、学級自治会、学校自治会活動を中心とし、子どもの生活と密着した教育活動が、子どもの自主性や主体性、総じて人格の形成にいかにも有効で重要な営みであるかが実証されたことである。ストライキの過程で、子どもたちが代表団を結成し、整然と村当局と交渉し、一糸乱れぬ

規律ある行動をとったことは何よりもこの成果を証明していた。しかもこれらのことが、マスコミを通じて広く宣伝（報道）されたことによって、全国の進歩的な教師に深く認識されるようになったのである。「文芸主義」的な教育運動や生硬なマルクス主義的教育思潮に対して、教育運動の原点である教育実践の重さを再発見・再認識させたところに極めて大きな意義があった。

第二は、子どもに支持され、父母に支持される教育実践であっても、天皇制絶対主義的教育体制と相容れないことが分かると、校長や視学の意味で全く理不尽な目に合わされることが白日の下にさらされ、教室や学校の中だけでは解決できないことが明瞭に意識されるようになったことである。教文協会は「同輩有志・佐藤」の署名で「檄」をとばし、「全教員諸君吾々自身の問題であり吾々の最も正しい要求に対する不合理な処置に対し反対しなければならない」とアピールした。また前記宇野東吉は一文の中で、「吾々は此の如き教育界内にあって、如何にして、吾々の生活を擁護すべきであるか。それは我々平教員<sup>(ママ)</sup>の団結である。吾々の力の増大を外にして、生活擁護の道はない。平教員の大同団結こそ、この盟休事件によって教へられねばならない」ことだと書き記した。さらに『教育週報』記者池田種生は、事件落着後潤徳校を訪問し、関係者に会って調査を行い、その記録を「嵐の跡を訪づねて」<sup>(7)</sup>と題して『教育時論』（1929年10月15日号）に発表（杉田庄三署名）しているが、「熱心に教育をして児童にも敬愛される教育者が、何故、校長の思想と合わないが故に転任させられねばならないか この命題をおし進めて行けば、現在の不合理なる社会制度の欠陥にぶつかる。今日の支配階級に都合よくなされている現教育制度においては、真の教育が不可能であることをこの事件は端的に物語っている」として「ここに於てか声を大にして叫びたいことは、真に教員の味方となる強力な『教員組合』の結成の必要である。教育を、そして教育者を生かす途は、ただこれ一つあるのみである」と主張したのであった。この「事件」を契機に、教員組合結成の必要性が切実性を持って実感されるようになったことはとりわけ大きいといわなければならない。事実教文協会は、その力に依拠して、全国的な教員組合の結成を直接目標として小学校教員連盟へと組織的に発展したのであった。

さらに第三として、この児童ストライキが従来のように労働組合や農民組合、あるいは部落解放を目指した全国水平社などによって指導されるのではなく、教師の組織によって指導された最初のストライキであるということを指摘しておかなければならない。しかも生徒の自治活動の成果が具体的に示されたものであり、彼らの自発的な総意によって決行されたものであって、後に「教労」「新教」の教師たちによって取り組まれる自治会活動やピオニール活動の先駆的な形態、先駆的な役割を果たすものであったのである。ちなみに、「教労」はその綱領的文書（後述の「渡辺良雄論文」）の中で「児童のストライキ権」「出欠席の自由」「自主的児童委員会の確立」「児童委員会による一切の要求の自由」などを公然と承認し、その実現を要求している。また「教労」神奈川支部の黒瀧雷助は松の花ピオニールを、脇田英彦は馬入ピオニールを組織し、「新教」京都支局の人見亨は田中部落で養正少年団を結成してピオニール運動を展開したのである。

以上みたように潤徳小学校のストライキは、浦辺にとって「自己変革」の契機になったばかりではなく、日本の教育運動を発展させるうえでも大きな役割を果たしたのであった。さらに、国

際的な教育労働者の組織「エドキンテルン」（教育労働者インタナショナルの略称）が機関誌『教育労働者』（“Teacher's International”）1929年11～12月号でこの問題を取りあげたことによって、世界の教育労働者の目にとまることにもなったのである。

### 3, 教育運動の新たな展開 「教労」「新教」の結成へ

新しい任地西多摩郡五日市小学校での浦辺の教員生活は、村の有力者の監視と校長や校長にベッタリとくっついている同僚教師の中ですっかり孤立した形で進められた。しかしその教育実践は、潤徳小時代の経験を基本的に引き継いで、生徒の自主性・主体性を伸ばす方向で進められていく。他のクラスの子どもたちがおとなしく生気のないのに比べて、浦辺学級だけは蜂の巣をつつついたように騒々しく見えた。「子どもを解放して、漸次自主的に教室の規律を建設しようというわけ」<sup>(8)</sup>であった。校長の干渉をはじめ条件は大変厳しかったが長い間閉じ込められていた子どもを解放し、自主的規律を作り出していくためには「自由主義教育」の教師たちが生み出した教育方法、手段が極めて有効であったのである。

他方浦辺の生活は、浅川小や潤徳小の時のようにほとんど総ての時間を子供と教育のために費やすということではなくなっていく。マルクス・エンゲルスらの社会科学書の学習に熱中し、『第二無産者新聞』や『戦旗』、『童話運動』などを熱心に購読するようになった。同僚の中に思いを同じくする女教師（宮本智恵子）を見出し、研究会なども行うようになり、また週末には東京に出かけて教員の組織活動にも参加するようになっていった。しかもその運動は新たな興隆期にさしかかっていたのである。

1929年10月、教文協会から発展した小学校教員連盟は、「我等の生活を圧迫する不合理と不正義とに抗争せんとする。而し我等は団結の力によって教育の徹底的改造を企画する。全国の教員結集せよ！」と「宣言」し、「教員自主権の確立」、「教育機会均等」をはじめとする7項目の「綱領」と、「教員の任免権を校長より剥奪せよ」、「小学校の兵営化に反対せよ」、「小学校教員に自由を与えよ」など12項目の「スローガン」を確定し、活発な運動を展開する。結成当初の連盟員は30余名であったがまもなく60名を越え（東京の八王子、荏原、大森、京橋、本所の各地および川崎、山梨などに支部を確立）、謄写印刷の機関紙『教育者』も刊行できるようになった。さらに「連盟」は、教員の生活権擁護を自らの手で支えるために幅広く呼びかけて東京教員消費組合を設立した。組合は12月の創立総会において既に300名の組合員を組織し、以後2年半ほどにわたって当局の弾圧をかいくぐりながら活発に活動した。しかもそれは「連盟」（後には「教労」「新教」）のメンバーを拡大するプール機関ともなったのである。

「連盟」や「消費組合」のこのような動向に不安を抱いた検察・警察当局は中心人物の一人松永貴平を街頭で逮捕し、そこから手にいれた名簿をもとに組織の弾圧に乗り出す。12月から翌30年1月にかけて渡辺雪雄、上田唯郎、本庄陸男、佐野五郎の合わせて5名を検挙した。但し、「連盟」は創立されてからまだそれほど時間を経てなく、本格的な実践運動をするに至っていな

かったので、警察・検察当局は事情を問い質しただけで釈放ということになった。ところが事態を知った東京府学務課は驚き慌て、「未曾有の教員赤化事件」として、3月に退職12名、休職1名、譴責13名という厳罰処分を行った。これが新興教育運動（の前史）における最初の「犠牲者」であった。退職処分を受けた者たちは、本庄、渡辺、松永、佐野をはじめほとんど皆「依願退職」の形を採ったが、「連盟」八王子支部に所属していた山口近治、増淵 穰、町田知雄の3人だけは、検挙もされず、単に「連盟」のリスト載っているだけで「退職願」を出せというのは不当だとしてそれを拒否、徹底して抵抗した。困惑した府学務当局はあれこれ手を使い、最終的に「小学校令施行規則第二百七十七条」の「特別処分」規定（「休職又ハ退職ヲ命ズル必要アリト認メタルトキハ府県知事ハ文部大臣ノ指揮ヲ受ケ特別ノ処分ヲ為スコトヲ得」）に基づいて処分としては最も重い「解職」命令を出して彼らを退職に追い込んだのであった。3人は、4月に「三教員・不当誹謗真相発表大演説会」を開催して会場一杯の500名を越える教員や父母、一般市民に処分の不当性と教員が団結することの必要性を訴え、また東京府知事を相手どって「退職辞令取り消し」の行政訴訟を起こすなどして反撃を行ったが、「連盟」の受けた組織的打撃は大きく、再建することはできなかった。この弾圧の時、浦辺は、小学校教員連盟の結成時からこれに参加し、「消費組合」の創立総会にも参席していたが、リスト漏れで検挙もされず行政処分からも免れたのであった。

小学校教員連盟の活動と弾圧、それに対する反撃などの経験は山口をはじめとする活動家たちに反省と新たな決意を促すところとなった。すなわち、労働者階級との組織的連携を図らなかったため教員の同人的セクト的活動に終始したこと、そのため組織を大きく拡大することができなかったこと、それを克服するためには改めて合法的な教員組合の結成準備にとりかかる必要があること、が強く認識されたのである。

こうした認識に基づいて、東京（本庄、山口、町田、増淵、浦辺ら）と神奈川（岡本信夫、中村武敏、黒瀧、増田、小出ら）の教師たちが中心となり、プロレタリア科学研究所の山下徳治、浅野研真や、教育ジャーナリストの池田種生、志垣 寛ら著名人が加って結成されたのが日本教員組合準備会（1930年5月）である。委員長には下中弥三郎（「大正」期の啓明会、日本教員組合啓明会の指導者で、出版社平凡社の創設者）が推されて就任した。「準備会」は「宣言」で、1929年の大恐慌以来「資本主義社会組織に根ざす産業界の深刻なる不況」によって労働者階級は「大衆の永久的失業群」として「街頭に投げ出」され、「支配者の命のままに従っている羊の如き教育者にも尚生活権のハク奪があり、容赦ない合理化の脅威がある」こと、「官制教育（員）会」は「却つてわれわれに飽くことなき劣悪なる環境の下にドレイの忍従を強い」ていること、したがって「われわれが自らたち上らざるかぎりかかる屈辱より自らを解放することはできない」として、「全日本三十万の教員諸君はけっ起せよ」「即時全日本教員組合を結成せよ」と呼びかけたのであった。また「準備会」は、「教員の生活権の擁護、伸張並びに社会的地位の向上及び社会状勢の進展に沿う教育の遂行を期す」として「転免権の濫用絶対反対」など9項目からなる「全日本教員組合綱領（草案）」を確定し、講演会、座談会などを開いて会員の組織化を図っていつ



た。しかしながらそういった公然たる活動は行政当局や警察から常に弾圧の対象とされる。集会は開会宣言と同時に解散を命ぜられたり、演説の途中で「中止!」というようなことが度々だった。またこの種の集会に参加するだけで「注意人物」「赤化教員」とされ、校長や視学によって不意転任や退職を強要されかねない、というのが「治安維持法」下の当時の状況であった。こうした状況では、「準備会」の目指したような方向で教員組合を作ることができない。そこから「現段階にあっては、いかなる組織形態をとろうとも、それが真に大衆の利益を守って階級的立場にたつかぎり、合法的存在は許されない。かりに、準備会が目指すような教組ができたとしても、けっきょく、それは改良主義的な御用組合にだらくするであろう。今、われわれにとって最も必要なものは、真に階級的な立場に立つ労働組合であって、その結成が急がねばならない」<sup>(9)</sup>という意見が大勢を占めるようになる。こうして「準備会」は東京、神奈川、秋田の3支部を結成したものの全国的な組合結成という目的を達成することなく、わずか2ヵ月ほどでその活動を停止し、改めて新たな教員組合づくりの準備が始められることになる。

浦辺はこの全日本教員組合準備会においても最初からメンバーとして参加しているが現職の教員であったためあまり表面に立つことはなかった。

この新しい教員組合をつくる試みは、小学校教員連盟への弾圧で「解職」されたで山口、町田、増淵と神奈川の現職教員増田、黒瀧、それに水戸高校の学生で学内の読書会事件で休学処分中の宮原誠一らが中心となって進められた。1930年8月、まず「非合法」の日本教育労働者組合準備会が結成される。その過程の中で、教員に合法的に働きかけ、やがて組合に組織化するためにその宣伝・煽動の役割を担う機関の必要性が自覚されるところとなった。他方、プロレタリア科学研究所の教育問題研究会責任者であった山下徳治らも「教育・教科の本質研究の成果を身につけた教育者のグループによる日本教育の啓蒙運動を企図する研究所の設立」<sup>(10)</sup>を志向していた。この二つの流れが重なり合って新しい教育研究所が誕生することになる。

1930(昭和5)年8月19日創立された新興教育研究所(「新教」)がそれである。「新教」はその「創立宣言」で、世界恐慌や農業恐慌などなど打ち続く経済恐慌の中で階級闘争が激化し、教員大衆もその流れに巻き込まれざるを得ない状況の中で、「当面の階級的任務は、反動的ブルジョア教育の克明なる批判とその実践的排撃であり、他方、新興教育の科学的建設とその宣伝である」とし、また「社会生活に対して政治が支配的である限り、教育の目指す人間の解放は、政治的自由の獲得なしには、幻想以外の何物でもあり得ない。組織には組織を以てする教育者の政治的实践の現実形態は××的教育労働者の団結に依る教育運動者組合運動でなければならない。教育労働者組合はわれわれの城塞であり、「新興教育」はわれわれの武器である」として、「親愛なる全国的教育労働者諸君、新興教育の旗の下に集れ!」と呼びかけたのであった。

この「新興教育研究所創立宣言」を冒頭に掲げた機関誌『新興教育』創刊号(1930年9月号として8月に自由社より発売)には、山下徳治の「新興教育の建設へ」と題する論文をはじめ多数の新鮮さと迫力に満ちた論稿が掲載された。そして「教労」準備会の組織を通じてのほかに全国の書店で公然と販売され、進歩的な教員の手に渡っていった。「創刊号四千部印刷、たちまち

売切れる盛況だったという<sup>(11)</sup>。このことは研究所の発展と「教労」の正式結成の見通しに大きな確信を与えた。「新教」は9月下旬改めて総会（創立総会）を開き、山下徳治所長以下32名の研究所員と、実験児童学研究会など12の研究部会設置を決定した。また書記局は山下、中田貞蔵（宮原誠一）、本庄陸男、長谷川一（佐野五郎）、田部 久（北村孫盛）で構成、組織部は「教労」準備会のメンバーが担当することとなった。

こうして研究所の本格的な活動が始まるとともに『新興教育』の読者網が各地に作られていく。当局の手によってしばしば「発禁」の処分がなされたが、それにもかかわらず大きな広がりをみせ、教員大衆ばかりでなく師範学校の生徒や高等師範学校の学生の中にも読者が生まれていった。また農民や都市の労働者の中にも支持を広げていった。

教員大衆の前に公然と教育労働者組合の必要性を訴える「武器としての『新興教育』」の発展によって「教労」正式結成の機運と条件が急速度に高まる。「新教」創立の2ヵ月後、1930（昭和5）年10月、いよいよ「われわれの城塞」である「教労」が結成されるところとなった。東京・東中野の山下徳治宅で非合法的に開かれた創立大会では、「教労」の「運動方針」「綱領」「スローガン」が決定され、「エドキンテルン綱領」の採用と階級的産業別労働組合の統一組織・日本労働組合全国協議会（「全協」）支持を決議した。指導部には委員長に山口近治がつき、ほかに増淵穰、増田貫一、黒瀧雷助らが執行委員となっている。この時決定した「運動方針」等は、そのままの形で発表するとただちに弾圧されてしまうため、一つの論文という形態をとって『新興教育』誌上（同年11月号）でさりげなく公表された<sup>(12)</sup>。山口が「渡辺良雄」名で執筆した「日本に於ける教育労働者組合に就いての一考察」（「渡辺良雄論文」と通称される）がそれである。全文は13ページにわたり、次の五つの章で構成されている。

- 一 教員はプロレタリアートの同盟軍たり得ないか
- 二 教員層の無産者的覚醒の社会的根拠
- 三 教育労働者組合はどんな目的の下に結成されるか
- 四 教育労働者は当面如何なる闘争を展開すべきか
- 五 組織は×（非）合法的に、学校単位に

この「論文」を通して確認できる「教労」の特質は、まず第一に教師の置かれている状態を政治的、経済的、社会的に分析して教育労働者組合結成の必然性を明らかにし、また教育労働者を労働者階級の中に位置付け、階級的立場を明確に表明したことである。第二は、運動の抗争相手を「資本家地主の政府」と規定した基本戦略を確定し、それとともに教師は歴史の発展を促す基本的な階級・階層ではないから「教育労働者組合は労働者農民への一援助隊」だと自己限定を行ったことである。第三は教育労働者の政治的、経済的、社会的諸要求とともに教育条件、労働条件の改善要求を掲げ、また「プロレタリア教育の建設」という教育労働者組合の「特殊任務」を前面に打ち出し、「新教」とも提携しながらその実現を目指したことである。そして第四は、それまでの教育運動の経験を総括し、厳しい弾圧体制の中での自己の主体的力量を考慮して、学校を単位とする非合法の組織活動を行うとしたことである。「真に階級的立場にたつ」教育労働者組

合運動を展開するためにはそういった活動形態が現実的であり最良のものと考えられたのであった。

こうして非合法の活動に入った「教労」は、弾圧を未然に防ぐことに意を用いながら、また弾圧されることをある程度覚悟して運動を進めることになる。その行く先は多難であったが、「武器としての『新興教育』」などを活用しながら徐々に力を蓄えていった。

ところでこの小論のねらいに即してみる時、新興教育運動の「前史」から「教労」「新教」の運動に至る中でとりわけ注目されることの一つは、教師の仕事を「労働」としてとらえ、さらに発展させて「教育労働」と把握したことであり、また教師を「教育労働者」としたことである。「教労」が、それまでの使われていた「教員組合」という言葉ではなく「教育労働者組合」というように自らを命名したことは端的にそのことを表現している、といわなければならない。また「渡辺良雄論文」で示されている92項目にわたる「当面」する闘争課題の中で、「同一労働に同一待遇」とか「教育労働以外の雑務反対」「時間外労働に対する手当を支給」などといっていることもそういった実例の一つである。さらに「新教」の機関誌『新興教育』にも「教育労働以外の雑務反対だ!」といった山口文一署名の意見が掲載されている(1930年10月号)。このような「教育労働」と「雑務」という表現の中にも教育労働の持つ労働としての一般的性格と特殊的性格(専門性)とを区別しながら合わせて認識するという把握の仕方を認めることができる。もっとも、この「教育労働」の認識を発展させるうえで決定的に重要な意味を持ったのは、「教労」とそれが加盟した「全協」の中央指導部との間で展開された「教労」のあり方をめぐる組織論の論争であった。しかしそれは時期的にこの小論の対象とするところから少し後のこととなるので、ここではこれ以上踏み込まないことにする。このあと執筆するつもりでいる次の論文で若干の検討をするつもりでいる。今ここで確認しておきたいことは運動の中で「教育労働」という考え方が登場してきたことと、教育実践と運動の主体を「教育労働者」という言い方でとらえるようになったということである。

「教労」の結成に際して浦辺はただちに加盟し、そのメンバーとなっている。このことは、全日本教員組合準備会に参画し、「教労」準備会にも加わっていた身であることから至極当然のことであった。また「新教」にあってもその最初から読者として関わりを持っている。但し、その両者においていずれも表立った活動をしていない。例えば「教労」の執行委員の中に浦辺は入っていないし、「新教」32名の創立所員の中にも名前を出していない。最大の理由はまだ現職の教員であったからである。山口ら組合結成の中心になってきた人々の間で「現職にある人たちは、原則として表面に出さないようにしておこう」<sup>(13)</sup>という配慮があったことが大きく関係していた。

このように組織的には表に立たなかったものの、学校の中での浦辺の活動には注目すべき変化が生まれていた。同僚の宮本智恵子らと研究会を開いたり、ともに「教労」に加盟して東京の三多摩支部で活動するようになった。特に記しておきたいことは浦辺の教育実践に「プロレタリア教育」意識が生まれていることである。前に記したように、浦辺の前任教(南多摩郡の潤徳小学校)での実践は、総ての子どもたちに分け隔てなく接し、「生活の苦しい子や成績の悪い子はとくによくめんどみてくれた」という教え子の「証言」にあるようなヒューマニズムに満ち溢れ

たものであったが、基本的にはベスタロッチの教育精神に傾倒し、「自由主義教育」の方法を活用するものであった。しかしながら児童盟休事件を経て五日市小学校に来てからは次第に「階級的なものの見方を知らせるプロレタリア教育」<sup>(14)</sup> というように自己の教育活動を新しく捉え直すようになっていった。但し、学級の子どもたち全体に試みた「プロレタリア教育」はすぐに困難に直面し、放棄せざるを得なくなる。校長の干渉がことのほか厳しく、とりまきの教員たちの目も意識せざるを得なかったし、町の有力者の仕打ちを恐れもしたからである。そこでクラスの生徒で、家の貧しい者や近所の子どもたちと親しくなり、家へ遊びに来る常連の子どもたちに『童話運動』や『少年戦旗』を読ませて「階級的なものの見方や考え方」ができるように導いていった。学校で書く彼らの作文（綴方）には「いつわりのない貧苦の生活や、学校への不満が大胆に書き綴ら」れるようになり、浦辺を喜ばせた<sup>(15)</sup>。そして、そういった中で生まれた数篇の作文を「自分の作文が活字になったら子どもたちはどんなによろこび、元気づけられるだろうか」との思い<sup>(16)</sup>で、『少年戦旗』に投稿するため発行元の戦旗社へ送付したのであった。1931（昭和6）年5月末のことである。

この『少年戦旗』というのは、1920年代の後半から展開される日本の労農少年団運動（ピオニール運動）の高まりの中で、工場・農村の少年少女に「プロレタリア意識」を育て、彼らを組織し、訓練するための読み物雑誌として発刊されたものである。初めは全日本無産者芸術連盟（「ナップ」）と日本プロレタリア作家同盟の共同機関誌『戦旗』の付録として1929（昭和4）年5月に創刊された（発行所戦旗社）。付録ではあったが独立の雑誌形態をとっていた。『戦旗』と同じ数だけ発行され、創刊号1万2000部、以後2000～3000部ずつ増加した。10月の第6号からは「プロレタリア少年少女のための唯一の雑誌」として『戦旗』から独立し、発行部数3000～4000部、その内2000部前後が『戦旗』の配布網を通じて組織的に配布された。しかし、各地で労働少年団運動が発展していたにもかかわらず、定価（20銭）の高さと打ち続く発売禁止処分などのために売れ行きは減少する。翌30年6月号から新聞型の『ショウネン・センキ』（タブロイド版）に改められたが、これも全号「発禁」で、休刊。31年6月新聞型『少年戦旗』として復刊するがやはり全号「発禁」処分を受け、12月を最後に、『戦旗』ともども廃刊のやむなきに至った。全部で21号まで発行されたが、その内12号が「発禁」処分にされるという猛烈な弾圧にさらされたのであった<sup>(17)</sup>。浦辺が投稿したのは31年5月のことであるので、正確には『ショウネン・センキ』から新聞型『少年戦旗』へ移行する時期のことであった。

この『少年戦旗』への投稿が浦辺の教員生活に終止符を打たせることになる。戦旗社に張り込んで郵便物を監視していた「特高」<sup>(18)</sup>の手によって押収され、用紙に印刷されていた「五日市小学校」名から浦辺の発送したものであることが分かってしまう。6月4日朝逮捕、取調べのため警察に連行された浦辺に対し、翌日にはすぐさま校長と警察署長とが退職を強要した。家庭の事情もあって浦辺はこの退職強要をやむなく受け入れることとなる。6月8日付の辞令には「小学校令施行規則第二百六条第二号後段により退職を命ず」<sup>(19)</sup>とあった。年月にして6年3ヵ月の教員生活がこうして終わった。

#### 4, 教職を離れて 「東京の同志諸君に訴ふ」

「戦前」浦辺は警察によって6回不当に逮捕されているが、この時が最初で、15日間にわたって留置場生活を余儀なくされた。しかしながら、教員を辞めさせられたとはいうもの、校長や警察が如何に強く迫っても浦辺の信ずるところを変えることはできなかった。否むしろこの時の経験は浦辺に自己の生き方に確信を与えるものとなったのである。後年浦辺は次のように述懐している。

「二週間の留置場生活は私に次のことを教えた。『資本主義社会では社会主義的な思想の教師は容れられない。教育は政治に支配され支配階級の利益に奉仕しない教育は抑圧されるということ、そして労働者階級は自分たちの利益になる教育をする権利があるし、そのためにはたたかなければならないということ』私は警察に監禁されることによって、自分の進路に確信をもった。」<sup>(20)</sup>

こうして浦辺は五日市の地を離れ、東京市内で生活することになる。教職を離れて1ヵ月後、浦辺は「東京の同志諸君に訴ふ」と題する「声明書」を書き、山口近治に見てもらった後「教労」の組織を通じて東京府下の全小学校に郵送配布した。また雑誌『新興教育』もこれを取りあげ、1931年8月号にそれを掲載した。7月6日の日付のあるその声明書は新興教育運動の研究はもとより、「戦前」の教育運動、より広くは日本の教育史にとって大きな史料価値を持っているので、2ページにわたるかなり長文なものであり紙幅が気になるが、あえてその全文をここで紹介しておくことにする。なお、浦辺自身も「戦後」に書いた論稿の中で二度この文書を活用・記載している。この小論の「はじめに」のところに書き記しておいた川田由太郎署名の「社会的目覚め即失業」の最後の部分と、『道づれ』の63～65ページのところである。ただ、そのいずれにもかなりの修正や補充があり、確かに読みやすくまた理解しやすくなっているが、歴史的史料という点では幾分問題があるのでここでは『新興教育』誌に掲載されたそのままの表現で記載することにする。但し旧漢字だけは改めて新漢字にした。

#### 東京の同志諸君に訴ふ

批度私が警察に留置されたことにつきましては、種々御同情にあづかり厚く御礼申し上げます。去月末放免になりましたから御安心下さい。六年間もの長い月日を皆様のお仲間入りにしてゐました。私が師範を卒業しましてから児童の生活に深く入れば入る程、嘗てベスタロッチが知り得なかった痛ましい現実の姿にぶつかりました。働いても働いても益々貧窮の深淵に沈まねばならぬ農民の陰惨な暗い生活の中にある児童の切実な要求や訴の解決を一体どうすればよいでせう。遊びたい盛りなのに生計のために木拾ひ、かやかり、梅拾ひ、新聞配達等に欠席早退せねばならぬ児童、昼飯さへろくに与へられぬ児童、そして才能を持ちながら高等科にさえ行くことができずに奉公に出される子供かうした児童の切なる訴を黙殺して教科書の蓄音器になることが何でできませう。本当に子供達を幸福にするものは決して単なる



教材研究や教授法の研究などではなく、もっともっと大きな大きな問題があるのではないでせうか。

環境は私に教育というものゝ内容を用捨なく赤裸々にしてくれました。私は私たちの毎日の営みが、生活故に純心を蝕ばまれ、歪められてる無産児童のためのものでないことを考へずには居られませんでした。社会的環境を変へることなしに正しい人間教育は生まれないことを知りました。(下線は柿沼)

一方農民の窮乏は減俸や諸手当削減となって私たちの生活権をおびやかさずにはありませんでした。農村の窮乏は教員の俸給が高いからであるやうな錯覚を以て農民から注目される弱き存在が私達教員ではないでせうか。

私はあるがまゝの現実の生活の中から光を見出して児童に輝かしい未来の到来をしらせねばなりません。師範の先生から聞いた天職はその実みぢめな無産者であり一つの賃金奴隷でしかなかったことを知った時私は無産階級の解放運動に目をそそぐにはあられませんでした。私は教室の中で運動場の片隅で児童としきりに生活を語り合ひました。私の家には恵まれぬ子供がよく遊ぶに來ました。私は彼らの真実の友だちであり、なつかしい兄であつたと思ひます。

ところが突然こん(この? 柿沼)始末です。検束の翌日校長は私に検束理由もきかず退職を強要して遂に私を失業群の中につき落してしまひました。警察と結託して部下教員の首切を強要するのがあのいつも温情や親切をふりまく校長の正体だったのです。

一体社会を正しくみることが何故いけないのでせう。無産者である私達教員が無産児童のほんとの味方になつて彼等を正しく導くことが何故悪いのでせう。何故教員はこんなにも政治的思想的に自由でないのでせうか。私達は社会の最後をピッコひき――うなだれて歩まねばならぬのでせうか。

毎日の新聞は何を報道してゐるでせうか。立派な、えらい人達の醜惡の暴露、絶望を抱いて享樂を追ふ人々、労働者を食ひ物にするダラ幹共、その一方には生活に圧迫されてゐる労働者、農民、下層俸給生活者の、冷酷な矛盾の多い社会相は何を物語るでせうか。不景氣だからとて遠慮(遠慮? 柿沼)もなく首切失業させられて今日のパンに苦しんでゐる人達の先頭に立つて首切反対を叫ぶと、もう赤だ、ロシヤだと警察へ監禁される事実は何を物語るでせうか。まるで無産者に死ねと言はないばかりです。警察は民衆の真実の味方でない事実をどうしませう。私は教職を奪はれて飢餓と戦わねばならぬなくなりました。けれど警察に監禁された事によつて決して真理はまげられないことを知りました。私のやりましたことは正しい事であり、無産者につき落されて居る教員がどうしても、なさねばならぬことだとはつきりわかりました。

私に加へられた圧迫は決して個人的なものではなく、将来益々重加する教員全体の問題ではないでせうか。それは私達が無産児童のほんとの味方となつて教育にあたるとき、又教員の生活権擁護のために起ち上がるとき必ず加へられるべき不当冷酷な圧迫であります。だが

さうだからと言って長い物に巻かれると言った風にだまつてゐたら私達の生活はどうされる  
でせう。『教員は弱い』とは誰もが言ふことばです。だが私たちは弱いからこそなほ一層一  
緒にかたまらねばなりません。団結は弱いものに残されたたつた一つの武器です。

もつとも現在でも教員会、互助会等があります。けれどもそれはちつとも私たちのものでは  
ありません。私たちをいつも奴隷の如く手なづけやうとしてる支配階級の犬のやうな校長  
団の手の中にあるのは御存知の通りです。

私たちは私たちの力で固く団結しなければならないと思ひます。そしてそのことは教員が  
個人主義的であると言っても、皆が力を合せて地味に粘り強くやつたなら決して出来ないこ  
とはないのです。

私はこの様な訳で今度首になりましたが、なほ学校に残つて居る皆さんが、愛する児童の  
ため、皆さんたちの為に益々御奮闘されることを希望致します。

七月六日

元西多摩郡五日市小学校訓導 浦 辺 史

ここには、良心的な教師たちが子どもの現実の姿をどのように見、そこから自己の教育活動を  
どのようなものとして考えたか、当時の教員たちはどんな状況におかれていたか、そしてまた教  
育労働者としての団結とその組織は何故必要なのかといったことが率直な筆致で分かりやすく書  
かれている。浦辺の教員時代が集約的に表現されているといつてもよい。

なお、浦辺は「戦後」に前記文献の中でこの「声明書」の全文を紹介した折に、下線部を「子  
供の生活条件をよくすることを考えることなしに真実の人間教育は決して生まれないことを知り  
ました」と書き直しているが、そこに示された「立場」は、保育学者・宍戸健夫氏がいうように  
「たえずその後の彼の児童観の基調となつていったものである」<sup>(21)</sup> といつてよい。また社会教育・  
生涯教育研究の大家であり、教育福祉論の開拓者である小川利夫氏は浦辺の「福祉なくして教育  
はなく、教育のない福祉はない」という言葉を何度も活用している<sup>(22)</sup> が、そこに込められた意  
味も「子供の生活条件……」という浦辺のこの文言と重なり合っている。つまり浦辺の教員とし  
ての活動と経験の中から生み出されたものだといふことができる。

教職を離れた後の浦辺は、子どもにかかわる仕事をしたいという思いを強く持ちながらも増淵  
譲に説得されて新興教育研究所に入り（1931年9月）、組織部の活動を担当することになる。  
以後、1932（昭和7）年10月、2度目の不当逮捕に至るまでの間、新興教育運動の中心的な担  
い手の一人として専従活動に従事し、重要な役割を果たしていった。この小論の次の課題はその  
浦辺の新興教育運動とその後の活動を検討することにおかれる。

おわりに

「戦前」の日本の教育は国家（天皇制国家）が主導する「お上」の事業であつた。「大日本帝国

憲法」(1889 = 明治 22 年 2 月 11 日発布)と「教育勅語」(正式には「教育ニ関スル勅語」, 1890 = 明治 23 年 10 月 30 日頒布)によってその教育理念・教育目的が規定され, 国定教科書とこれもまた国定の「教師用書」によって教育内容・教育方法が厳しく統制された。教員の思想統制は師範学校での教員養成の過程で厳格に行われ, また師範卒業と同時に短期現役兵として数ヵ月間(浦辺の時代は 5 ヶ月間)軍役に服し, 軍人としての訓練を受けることが義務づけられていた。

教員になった後にも折に触れ研修会・講習会などに強制・反強制的に出席することが求められた。さらに教員とその教育活動を監視・監察するために綿密な視学制度が整備された。教師の政治活動や組合活動などは「治安警察法」や「治安維持法」によって禁止されたり, 大幅な制限の下に置かれた。経済的な地位の劣悪さなどの不平・不満を解消するためには「聖職論」が準備された。

このような状況下で教師は, 青少年を天皇とその国(軍国主義・帝国主義の大日本帝国)のために役立ち, 「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」る(事変・戦争に際して献身する)忠良な臣民へとつくりあげることに邁進することが強く求められ, そこにこそ教師の存在価値があるとされた。象徴的な言い方をすれば, 教師は官僚, 軍人, 警察官とともに体制を支える四つの柱の一つとして民衆に対峙せざるを得ない立場に置かれていたのであった。

浦辺(たち)の教員としての活動はこういった状況に対する抵抗であり, 挑戦であった。目の前にいる子どもたちの悲惨な状態を正面から見つめ, それが資本主義社会の諸矛盾からきていることを認識し, また教師の置かれている困難の根源が社会の仕組みの中にあることを見抜いていったのが前の時代の教師たち, すなわち「大正新教育」「大正自由主義教育」の教師たちとの決定的な相違点であった。子どもたちの生存権を保障しその完全な解放を実現するためには, そして教師の生活権の確保と教育者としての社会的解放を図るためには, 教師が団結して立ち上がること, そのことが決定的な意味を持つと考えて実行に移していったのである。そのことを, 浦辺が求め実践した教師像に即していえば, ペスタロッチアンから教育労働者へ, ということであった。

[2004 年 11 月 3 日 了, 文化の日]

[註]

- (1) 岡本洋三『教育労働運動史論』289 ページ, 新樹出版, 1973 年 2 月。
- (2) 本稿「まえがき」で記載しておいた『季刊 教育運動研究』創刊号の「座談会」の中で, 浦辺は「浅川のころはね。ぼくはもっぱらペスタロッチだった」, 「ぼくはペスタロッチ教だった。真剣に, 世の中を変えるには子どもを変えればよいと思った。教育によって革命というものを考えた」と述べている。浦辺は, この浅川小教員のあと, 後に記すように順徳小学校, 五日市小学校と合わせて三つの小学校教員を経験するが, 後者の発言はこの浅川小時代ばかりでなく, 順徳小時代にも基本的に当てはまる。その浦辺が大きく転進していくのは順徳小での不意転任とそれを機に起きた児童の「同盟休校事件」以後のことである。なお, 浦辺の保育研究・保育運動の後継者といってもよい穴戸健夫氏が浦辺の著書『日本の児童問題』(新樹出版, 1976 年 5 月)の「解説」(「浦辺史 その歩みと仕事」)の中で当時の浦辺について「ペスタロッチ全集をむさぼり読み……」と記しているが, もしそうだとするとそれは玉川大学出版部から出された『ペスタロッチ全集』(全 5 巻)ということになる(ペスタロッチ研究の第一

人者といわれる長田新が中心となって企画・編集された平凡社の『ペスタロッツ全集』全 13 巻が出るのは「敗戦」後だいぶ経った 1959 年以後のことである。但しそれは 1927 年から 35 年にかけて出版されたものなので少なくとも浦辺の教員時代にその全部を目にするにはあり得ない。したがって、浦辺が読んだものはその全集の一部や、既に翻訳・刊行されていた『隠者の夕暮』、『ゲルトロードは如何に其の子を教ふるか』などであったと推定される。また先の「座談会」で児童文学者・菅 忠道の「ペスタロッツについては、おもにどういう人のものを読んで勉強したの」という質問に対して、浦辺は「広島師範教授長田新や福島政雄のもの」と答えているが、そうすると浦辺が当時読んだものは、時期的にみて長田 新『ペスタロッツの教育思想』（金港堂書店、1927 年）や福島政雄『ペスタロッツをめぐる』（イデア書店、1925 年）などということになる。いずれにしても生前の浦辺に確かめておけばよかったと悔やまれてならない。

- (3) 川田由太郎（浦辺 史）「社会的目ざめ即失業」、国分一太郎編『石をもて追われるごとく 受難教師の手記』所収、英宝社、1956 年 11 月。
- (4) 同前論稿。
- (5) 浦辺はこの時の経験を生かして「学校自治会の自主化！」と題する論文を書き（「川田吉太郎」署名）、『新興教育』1931 年 12 月号に掲載している。
- (6) アナーキズム（無政府主義）とボルシェビズム（共産主義）のこと。
- (7) この論稿は後に池田種生『動きゆく社会と教育の展望』（現代教育社、1932 年 7 月）に収録された。また同書は、1980 年 7 月に（第 2 次）新興教育復刻版刊行委員会編の『新興教育基本文献集成』第 4 巻として、白石書店から復刻・刊行されている。
- (8) （註 3）の論稿、および浦辺 史・竹代『道づれ 新しい保育を求めて』61 ページ、草土文化、1982 年 5 月。
- (9) 増淵 譲『日本教育労働運動小史』38 ページ、新樹出版、1972 年 7 月。
- (10) 森（旧姓山下）徳治「新興教育研究所創立当時の回想」、黒滝チカラ・伊藤忠彦編『日本教育運動史』第 2 巻『昭和初期の教育運動』所収、三一書房、1960 年 11 月。なお新興教育研究所の所長となる山下の、当時を回想した記録としてはこれ以外に「新興教育研究所の創立のころ」がある。新教懇話会編集・発行『新教の友』第 3 号、1959 年 7 月。井野川潔・森谷 清・柿沼 肇編『嵐の中の教育 1930 年代の教育運動』に再録、新日本出版社、1971 年 11 月。
- (11) 「こぼれ話」、『新興教育』複製版刊行委員会事務局編集・発行『「新教」複製版月報』第 1 号、1965 年 10 月。
- (12) こうした配慮・工夫にもかかわらず『新興教育』のこの号は発売禁止処分にされてしまう。しかしこのような場合に備えて検閲申請書を当局に出す前に読者に郵送してしまうという手がしばしばとられたのであった。
- (13) 山口近治『治安維持法下の教育労働運動』50 ページ、新樹出版、1977 年 12 月。
- (14) 浦辺 史・竹代『道づれ』61 ページ。
- (15) 同前。
- (16) 「社会的目ざめ即失業」および『道づれ』に記載のある声明書「東京の同志諸君に訴う」の中にこのように記されている。なお、後に見る『新興教育』誌掲載の原文（「東京の同志諸君に訴ふ」）にはこの文章はない。
- (17) この『少年戦旗』の記述については、刊行の提案者であり、編集責任者でもあった児童文学者・猪野省三の「『少年戦旗』の思い出」（蔵原惟人・手塚英孝編『物語 プロレタリア文学運動 上』所収、新日本出版社、1967 年 7 月）を参考にした。なお、『少年戦旗』は、1977 年 10 月、戦旗復刻版刊行委員会によって復刻刊行された。またその親雑誌でもあった『戦旗』も、その少し前の 6 月に同委員会の手で復刻刊行されている。
- (18) 特別高等警察の略称。「戦前」の天皇制絶対主義体制の下で民主主義や社会主義などの思想や運動に対して過酷な弾圧を行った。1910（明治 43）年 5 月から開始された「大逆事件」の検挙を契機にして翌 11 年 8 月警視庁に特別高等課が新設されたのが始まり。1925（大正 14）年 4 月の「治安維持法」制定

を経て、28（昭和3）年7月には全国の県警察部で特高課の設置が完了して、特高警察網ができあがった。内務省警保局保安課が統括し、官庁、民間企業、学校をはじめ各種団体・組織の中に情報網を張り巡らし、自由主義者、宗教者、朝鮮人なども含めて多数の人々を逮捕・投獄した。また残虐な拷問等によって「転向」や「スパイ」になることを強要し、虐殺された者も少なくない。「戦後」の1945（昭和20）年10月、「治安維持法」や警保局保安課などと一緒に廃止された。代表的な研究書として荻野富士夫『特高警察体制史 社会運動抑圧取締の構造と実態』（せきた書房、1984年9月）などがある。

(19) 「小学校令施行規則第二百二十六条」は「市町村立小学校正教員ハ左ノ各号ノ一該当スルトキハ府県知事ハ之ニ退職ヲ命スコトヲ得」と規定され、その第二号後段は「自己ノ便宜ニヨリ退職ヲ出願シタルトキ」となっている。

(20) 前掲論稿（註3）、および前掲書（註12）62ページ。また、浦辺史・竹代『福祉の昭和史を生きて』181ページ。

(21) 穴戸健夫「解説 浦辺史 その歩みと仕事」、浦辺 史『日本の児童問題』所収、新樹出版、1971年5月。

(22) 小川利夫氏が浦辺のこの文言を如何に重視しているかということについては、同氏が「この一句は私の教育福祉研究にとって導きの光であるとともに、私の社会教育研究にとっても重い意味を持つ一句である」と書いていることから分かる。小川利夫「浦辺先生と教育福祉論」、浦辺史先生米寿記念誌刊行会編集・発行『浦辺史先生米寿記念誌 昭和史を共に生きて』所収、1993年6月。